

小夜啼鳥

NATTERGALEN

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫

みなさん、よくごぞんじのように、シナでは、皇帝はシナ人で、またそのおそばづかえのひとたちも、シナ人です。

さて、このお話は、だいぶ昔のことなのですがそれだけに、たれもわすれてしまわないうち、きいておくねうちもあろうというものです。

ところで、そのシナの皇帝の御殿ごてんというのは、どこもかしこも、みごとな、せとものずくめでして、それこそ、世界一きらびやかなものでした。

なにしろ、とても大したお金をかけて、ぜいたくにできているかわり、こわれやすく、うっかりさわると、あぶないので、よ

ほどきをつけてそのそばをとおらなければなりません。御苑ぎよえんにはまた、およそめずらしい、かわり種の花ばかりさいていました。なかでもうつくしい花には、そばをとおるものが、いやでもそれにきのつくように、りりりといいいねになるぎんのすずがつけてありました。ほんとうに、皇帝の御苑は、なにからなにまでじょうずにくふうがこらしてあつて、それに、はてしなくひろいので、おかかえの庭にわづくり 作さくでも、いったいどこがさかいなのか、よくはわからないくらいでした。なんでもかまわずどこまでもあるいて行くと、りっぱな林にでました。そこはたかい木立こだちがあつて、そのむこうに、ふかいみずうみをたたえています。林をではずれるとすぐ水で、そこまで木きのえだがのびているみぎわちかく、帆ほ



をかけたまま、大きなふねをこぎよせることもできました。

さて、この林のなかに、うつくしいこえでうたう、一羽わのさよなきどりがすんでいましたが、そのなきごえがいかにもいいので、日びのいとなみにおわれているまずしい漁師りょうしですらも、晩、網あみをあげにでていって、ふと、このことりのうたが耳にはいると、ついたちどまつて、ききほれてしまいました。

「どうもたまらない。なんていいこえなんだ。」と、漁師はいいましたが、やがてしごとにかかる、それなり、さよなきどりのこともわすれていました。でもつぎの晩ばん、さよなきどりのうたっているところへ、漁師がまた網にでてきました。そうして、またおなじことをいいました。

「どうもたまらない、なんていいこえなんだ。」

せかいじゅうのくにぐにから、りよこうしゃ旅行者が皇帝のみやこにやつてきました。そうして、皇帝の御殿と御苑のりっぱなのにかんしんしましたが、やはり、このさよなきどりのうたをきくと、口をそろえて、

「どうもこれがいつとうだな。」といいました。で、旅行者たちは、国にかえりますと、まずことりのはなしをしました。学者たちは、その都と御殿と御苑のことをいろいろと本にかきました。でもさよなきどりのことはけっして忘れないどころか、この国いちばんはこれだときめてしまいました。それから、詩のつくれるひとたちは、深いみずうみのほとりの林にうたう、さよなきどり

のことばかりを、この上ないうつくしい詩につくりました。

こういう本は、世界じゅうひろまって、やがてそのなかの二三冊は、皇帝のお手もとにとどきました。皇帝は金のいすにこしをかけて、なんべんもなんべんもおよみになって、いちいちわが意をえたりというように、うなずかれました。ごじぶんの都や御殿や御苑のことを、うつくしい筆でしるしているのをよむのは、なるほどたのしいことでした。

「さはいえど、なお、さよなきどりこそ、こよなきものなれ。」と、そのあとにしかし、ちゃんとかいてありました。

「はてな。」と、皇帝は首をおかしげになりました。「さよなきどりというか。そんな鳥のいることはほとんどしらなかつた。そん

な鳥がこの帝国のうちに、しかも、この庭うちにすんでいるというのか。つきいたこともなかったわい。それほどのものを、本でよんではじめてしるとは、いったいどうしたことだ。」

そこで皇帝は、さつそく侍じじゅうちよう従長をおめしになりました。この役人は、たいそう、かくしきばった男で、みぶんの下のものが、おそるおそるはなしかけたり、または、ものでもたずねても、ただ「ペ」とこたえるだけでした。ただしこの「ペ」というのに、べつだんのいみはないのです。

「この本でみると、ここにさよなきどりというふしぎな鳥がいることになっているが。」と、皇帝はおたずねになりました。「しかもそれがわが大帝国だいていこくない国内で、これが第一等だいいつとうのものだとして

いる。それをどうして、いままでわたしにいわなかったのであるか。」

「わたくしもまだ、そのようなものがあることは、うけたまわったことがございません。」と、侍従長はいいました。「ついぞまだ、宮きゆうちゆう中へすいさんいたしたこともございません。」

「こんばん、さつそく、そのさよなきどりとやらをつれてまいって、わがめんぜんであたわせてみせよ。」と、皇帝はおっしゃいました。「みすみす、じぶんがもっていて、世界じゆうそれをしてしているのに、かんじんのわたしが、知らないではすまされまい。」

「ついぞはや、これまでききおよばないことでございます。」と、

侍従長は申しました。「さつそくたずねてみます。みつけてま
いりまする。」

さて、そうはおこたえ申しあげたものの、どこへいって、それ
をみつけたものでしょう。侍従長は御殿じゅうの階かいだん段を上った
り下りたり、廊下ろうかや広間ひろまのこらずかけぬけました。でもたれにあ
つてきいても、さよなきどりのはなしなんか、きいたというもの
はありません。そこで侍従長は、また皇帝のごぜんにかけもどつ
てきて、さよなきどりのことは、本をかきましたものの、かつて
なつくりばなしにちがいありませんと申しました。

「おそれながら陛下へいか、すべて書物しょもつにかいてありますことを、そ
のままお用もちいになつてはなりません。あれはこしらえごとでござ

います。いわば、ようじゆつ妖術まほう魔法のるいでございます。」

「いや、しかし、わたしがこの鳥のことをよんだ本というのは、
と、皇帝はおつしやいました。「えいせいふんぶ叡聖文武なる日本皇帝よりお
くられたもので、それにうそいつわりの書いてあろうはずはない
ぞ。わたしはぜひとも、さよなきどりのこえをきく。どうあつて
も、こんばんつれてまいれ。かれはわたしの第だいいち一のきにいり
あるぞ。それゆえ、そのとおり、とりはからわぬにおいては、こ
の宮中につかえるたれかれのこらず、夕食ののち、よこ横ぼらツ腹をふむ
ことにいたすから、さようこころえよ。」

「チンペ。」と、侍従長は申しました。それからまた、ありつ
たけの階段を上ったり下りたり、廊下や広間をのこらずかけぬけ

ました。御殿の役人たちも、たれでも横ツ腹をふみにじられたくはないので、そのはんぶんは、いっしよになって、かけまわりました。そこで、世界じゅうがしっていて、御殿にいるひとたちだけがしらない、ふしぎな、さよなきどりのそうさくが、はじまりました。

とうとうおしまいに、役人たちのつかまえたのは、お台だいどころ所
の下ばたらきのしがないむすめでした。そのむすめは、こういいました、

「まあ、さよなきどりですって、わたしはよくしっておりますわ。ええ、なんていいこえでうたうでしょう。まいばん、わたくしは、びようきでねている、かわいいそうなかあさんのところへ、ごちそ

うのおあまりを、いただいてもつていくことにしておりますの。
かあさんは、湖水こすいのふちに、すんでいましてね、そこからわたし
がかえつてくるとき、くたびれて、林のなかでやすんでいますと、
さよなきどりの歌がきこえます。きいているうち、まるでかあさ
んに、ほおずりしてもらうようなきもちになりましたね、つい涙なみだ
がでてくるのでございます。」

「これこれ、女中。」と、侍従長はいいました。「おまえに、お
台所でしつかりした役をつけてやって、おかみがお食事しょくじをめし
あがるところを、おがめるようにしてあげる。そのかわり、その
さよなきどりのいるところへ、あんないしてもらいたい。あの鳥
は、さつそく、こんばん、ごぜんにめされるのでな。」

そこでみんな、そのむすめについて、さよなきどりがいつもうたうという、林のなかへはいつて行きました。御殿のお役人が、はんぶんまで、いっしょについていきました。みんながそろそろ、ならんであるいて行きますと、いっぴきのめうしが、もうと、なきだしました。

「やあ。」と、わかい小姓こしやうがいました。「これでわかったよ。ちいさないきものにしては、どうもめずらしくしつかりしたこえだ。あれなら、たしかもうせん、きいたことがあるぞ。」

「いいえ、あれはめうしが、うなっているのよ。」と、お台所の下ばたらきむすめがいました。

「鳥のところまでは、まだなかなかですわ。」

こんどはかえるが、ぬまの中で、けるけるとなきはじめました。

「りっぱなこえだ。」と、皇室づきの説教師せつきょうしがいました。

「これ、どこかに、さよなきどりのこえをききつけましたぞ。まるでお寺のちいさなかねがなるようじゃ。」

「いいえ、あれはかえるでございますわ。」と、お台所むすめはいいました。「でも、ここまでくれば、もうじき鳥もきこえるでしょう。」

こういつているとき、ちようどさよなきどりが、なきはじめました。

「ああ、あれです。」と、むすめはいいました。「ほら、あすこに、とまっているでしょう。」

こういって、このむすめは、むこうの枝えだにとまっている、灰色はいしたことを、ゆびさしました。

「はてね。」と、侍従長はいいました。「あんなようすをしているとは、おもいもよらなかつたよ。なんてつまらない鳥なんだ。われわれ高貴こうきのものが、おおぜいそばにきたのにおじて、羽根はねのいろもなくしてしまつたにちがいない。」

「さよなきどりちゃん。」と、お台所むすめは、大きなこえで、いいました。「陛下へいかさまが、ぜひごぜんで、うたわせて、ききたいとおっしゃるのよ。」

「それはけつこうこの上なしです。」と、さよなきどりはいいました。そうして、さつそくうたいだしました。そのこえのよさ

といたらありません。

「まるで玻璃鐘はりしようの音ねじゃな。」と、侍従長はいいました。「あのちいさなのだが、よくもうごくものだ。どうもいままであれをきいていなかったのがふしぎだ。あれなら宮中でも、じょうじょう上上の首尾しゆびじやろう。」

「陛下さまのごзенですから、もういちどうたうことにいたしましょうか。」と、さよなきどりはいいましたが、それは、皇帝ごじしんそこの場にきておいでになることと、おもっていたからでした。

「いや、あっぱれなる小歌手しょうかしゆ、さよなきどりくん。」と、侍従長はいいました。「こんばん、宮中のえんかいに、君を招しょうたい待

するのは、大いによるこばしいことです。君は、かならずそのうつくしいこえで、わが叡聖文武えいせいぶんぶなる皇帝陛下を、うつとりとさせられることをござろう。」

「わたしのうたは、林の青葉の中できいていただけに、かぎるのですがね。」と、さよなきどりはいいました。でも、ぜひにと
いう陛下のおのぞみだときいて、いそいそついていきました。

御殿はうつくしく、かざりたてられました。せとものでできているかべも、ゆかも、何千なんせんとない金のランプのひかりで、きら
きらかがやいていました。れいの、りりり、りりりとなるうつく
しい花は、のこらずお廊下のところにならべられました。そこを、
人びとがあちこちとはしりまわると、そのあおりかぜで、のこら

ずのすずがなりひびいて、じぶんのこえもきこえないほどでした。

皇帝のおでましになる大ひろまのまん中に、金のとまり木がおかれました。それにあのさよなきどりがとまることになっていました。宮中の役人たちのこらず、そこにならびました。あのお台所の下ばたらきむすめも、いまではせいしきに、宮中づきのごぜん部ぶがかり係にとりたてられたので、ひろ間のとびらのうしろにたつことをゆるされました。みんな大だいれいふく礼れい服ふくのはれすがたで、いつせいに、陛下がえしやくなさった灰いろのことりに目をむけました。さて、さよなきどりは、まことにすばらしくうたつてのけたので、皇帝のお目にはなみだが、みるみるあふれてきて、それがほおをつたわって、ながれおちたほどでした。するとさよなきどり

は、なおといつそういいこえで、それは、人びとのこころのおくそこに、じいんとしみいるように、うたいました。陛下は、たいそう、およろこびになつて、さよなきどりのくびに、ごじぶんの金のうわぐつをかけてやろうとおっしゃいました。しかし、さよなきどりは、ありがとうございますが、もうじゅうぶんに、ごほうびは、いただいておりますといたしました。

「わたくしは、陛下のお目になみだのやどつたところを、はいけんいたしました。もうそれだけで、わたくしには、それがなによりもけつこうなたからでございます。皇帝の涙というものは、かくべつなちからをもっております。神かけて、もうそれが身にあまるごほうびでございます。」

こういつて、そのとき、さよなきどりは、またもこえをはりあげて、あまい、たのしいうたをうたいました。

「まあ、ついでおぼえのない、いかにもやさしくなでさすられるようなかんじでございますわ。」と、まわりにたつた貴婦人^{きふじん}たちがいいました。それからというもの、このご婦人たちは、ひとからはなしかけられると、まず口に水をふくんで、わざとぐぐとやって、それで、さよなきどりになったつもりでいました。とうとう、すえずえの、べつとうとか、おはしたというひとたちまでが、この鳥には、すっかりかんしんしたと、いいだしました。

この連^{れんじゆう}中をまんぞくさせることは、この世の中でおよそむずかしいことでしたから、これはたいしたことでした。つまり、

さよなきどりは、ほんとうに、うまくやってのけたわけでした。

さて、さよなきどりは、それなり宮中にとめられることになりました。じぶん用のとりかごをいただいて、まいにち、ひる二どと、よるいちどとだけ、外出をゆるされました。でかけるときには、十二人のめしつかいがひとりひとり、とりのあしにむすびつけたきぬいとを、しっかりとつて、おともをして行きました。こんなふうにしてでかけたのでは、いっこうにおもしろいはずがありませんでした。

このめずらしいさよなきどりのことは、みやこじゅうのひょうばんになりました。そうして、ふたりであえば、そのひとりが、

「*さよ。」と、いうと、あいては、「なき。」とこたえます。

*デンマークの原語では「ナデル（小夜）」。「ガール（啼鳥）」にはおばかさんの意味もある。

それから、ふたりはほつとためいきをついて、それでおたがい、わけがわかっていました。いや、物売のこどもまでが、十一人も、さよなきどりという名をつけられたくらいです。でも、そのうちのひとりとして、ふしらしいものうたえるのでは、ありませんでした。――

ところで、ある日、皇帝のおてもとに、大きな小包こづつみがとどきました。その包のうわがきに、「さよなきどり。」と、ありました。

「さあ、わが国の有名なことりのことを書いたしよもつが、またきたわい。」

皇帝はこうおっしゃいましたが、こんどは、本ではなくて、ここにはいった、ちいさなさいく物ものでした。それはほんものにみまがうこしらえものの、さよなきどりでしたが、ダイヤモンドだの、ルビイだの、サファイヤだのの宝ほう石せきが、ちりばめてありました。ねじをまくと、さっそく、このさいく物の鳥は、ほんものの鳥のうたうとおりを、ひとふしうたいました。そうして、上したに尾をうごかすと、金や、銀が、きらきらひかりました。首のまわりに、ちいさなりボンがいわえつけてあって、それに、

「日本皇帝のさよなきどり、中華皇帝のそれにはおよびもつかぬ、

おはずかしきものながら。」と、書いてありました。

「これはたいしたものだ。」と、みんなはいいました。そうして、このさいく物もののことりをはこんできたものは、さつそく、帝室ていしつさよなきどりけんじょうし献上使、というしようごうをたまわりました。

「いつしよになかしたら、さぞおもしろい二部合がっしょう唱がっしょうがきけるだろう。」

そこで、ふたつのさよなきどりは、いつしよにうたうことになりました。でも、これはうまくいきませんでした。それは、ほんもののさよなきどりは、かつてに、じぶんのふしでうたって行きましたし、さいく物のことりは、ワルツのふしでやったからでした。

「いや、これはさいく物のことりがわるいものではございません。」
と、くないがくしちよう宮内楽師長がいました。「どうしてふしはたしかなもので、わたくしどもの流儀りゆうぎにまったくかなっておりません。」

そこで、こんどは、さいく物のことりだけがうたいました。ほんもののおなじようにうまくやって、しかもちよいとみたところでは、ほんものよりは、ずっときれいでした。それはまるで腕うで輪でわか、胸むねにとめるピンのように、ぴかぴかひかかっていました。

さいく物のことりは、おなじところを三十三回も、うたいました。が、くたびれたようすもありませんでした。みんなはそれでも、もういちどはじめから、ききなおしたいようでしたが、皇帝は、いきているさよなきどりにも、なにかうたわせようじやないかと、

おっしゃいました。——ところが、それはどこへいったのでしよう。たれひとりとして、ほんもののさよなきどりが、あいていたまどからとびだして、もとのみどりの森にかえっていったことに、気づいたものは、ありませんでした。

「いったい、これはどうしたというわけなのか。」と、皇帝はおっしゃいました。ところが、御殿の人たちは、ほんもののさよなきどりのことを、わるくいつて、あのさよなきどりのやつ、ずいぶん恩しらずだといいました。

「なあに、こちらには、世界一上等の鳥がいるのだ。」と、みんないきました。

そこで、さいく物のことが、またうたわせられることになり

ました。これで三十四回おなじうたをきくわけになったのですが、それでもなかなか、ふしがむずかしいので、たれにもよくおぼえることができませんでした。で、楽師長は、よけいこのとりをほめちぎって、これはまったく、ほんものさよなきどりにくらべて、つくりといい、たくさんのみごとなダイヤモンド飾りといい、ことさら、なかのしかけといたら、どうして、ほんものよりは、ずつとりっぱなものだといいきりました。

「なぜと申しまするに、みなさま、とりわけ陛下におかせられまして、ごらんのとおり、ほんものさよなきどりにいたしますると、つぎになにをうたいだすか、まえもって、はかりしる事ができません。しかるに、このさいくどりにおきましては、すべて

がはつきりきまつております。かならずそうなつて、かわることがございませぬ。これはこうだと、せつめいができます。なかをあけて、どうワルツがいれてあるか、それがうたいすすんで、歌がつぎからつぎへとうつて行きますぐあいを、人民ども、だれのあたまにもはいるように、しめしてみせることが、できるのでございませぬ——。」

「まつたくご同どうかん感であります。」と、みんなはいいました。

そこで、楽師長は、さつそく、つぎの日にちようび曜日には、ひろく人民たちに、ことりはいかん拝観をゆるされるようにねがいました。ついでにうたもきかせるようにと、皇帝はおめいじになりました。そんなわけであれもそのうたをきくことになつて、まるでお茶によ

ったようによろこんでしまいました。このお茶にようということ
は、シナ人のくせでした。そこでみんな、「おお。」と、いつた
のち、人さしゆびをたくさし上げて、うなずきました。けれど
も、ほんものさよなきどりをきいたことのある、れいのびんぼ
う漁師りようしは、

「なかなかいいこえでうたうし、ふしもにているが、どうも、な
んだかものたりないな。」といいました。

ほんものさよなきどりは、都の土地からも、国からもおわれ
てしまいました。

さいくどりは、皇帝のお寝台ねだいちかく、絹きぬのふとんの上に、すわ
ることにきまりました。この鳥に贈られて来た黄金と宝石が、の

こらず、鳥のまわりにならべ立てられました。鳥は、「帝室御ていしつおん夜詰歌よづめかしゆちよう手長」の榮えい職しよくをたまわり、左側ひだりがわ第一位だいいちの高位こういにもものぼりました。たいせつなしんぞうが、このがわにあるというので、皇帝は、左ひだりがわをことにおもんぜられました。するとしんぞうは、皇帝でもやはり左がわにあるとみえますね。それから、れいの楽師長は、さいくどりについて、二十五巻もある本をかきました。さて、この本は、ずいぶん学者ぶつてもいて、それに、とてもしちむずかしい漢語かんごがいっぱい、つかってありました。そのくせたれも、それをよんでよくわかったといっていました。それはたれもばかものだとおもわれた上、横ツ腹をふまれるのがいやだからでした。

そうこうしているうちに、まる一年たちました。皇帝も、宮中のお役人たちも、みんなほかのシナ人たちも、そのさいくどりの歌の、クルツク、クルツク、という、こまかいふしまわしのところまでのこらずおぼえこんでしまいました。ところでそのためよけい、この鳥がみんなをよろこばせたというわけは、たれもいっしよになって、その歌をうたうことができたからで、またほんとうに、そのとおりやっていました。往来をあるいているこどもたちまでが、

「チチチ、クルツク、クルツク、クルツク」と、うたうと、皇帝もそれについておうたひになりました。——いや、もうまったく

うれしいことでした。

ところがあるばん、さいくどりに、せいっぱいうまくうたわせて、皇帝はね床の中でそれをきいておいでになるうち、いきなり、鳥のおなかの中で、ぶすつという音がして、なにかはぜたようでした。つづいて、がらがらと、のこらずのはぐるまが、からまわりにまわって、やがて、ぶつんと音楽はとまってしまいました。

皇帝はすぐとね床をとびおきて、侍医じいをおめしになりました。でも、それがなんの役にたつでしょう。そこで時計屋とけいやをよびにやりました。で、時計屋がきて、あれかこれかと、わけをきいたり、しらべたりしたあげく、どうにか、さいくどりのこしうだけは、

なおりました。でも、時計屋は、なにしろ、かんじんな軸うけじくが、すつかりすりへっているのに、それをあたらしくとりかえて、音楽をもどおりはつきりきかせるくふうがつかないから、せいぜい、たいせつにあつかっていただくほかはないと、いいました。これはまことにかなしいことでした。もう一年にたつたいちどだけ、うたわせることになったのですが、それさえ、おおすぎるといふのです。でもそのとき、楽師長は、れいの小むずかしいことばばかりならべた、みじかいえんぜつをして、なにも、これまでとかわったところはないと、いいましたが、なるほど、歌は、これまでとかわったところは、ありませんでした。

さて、それから五年たちましたが、こんどこそはほんとうに、

国じゅうの大きなかなしみがやってきました。じんみんたちが、
ここからしたつていた皇帝が、こんど、ごびようきにかかられ
て、もうながいことはあるまいという、うわさがたちました。あ
たらしい皇帝も、もうかわりにえらばれていました。じんみんた
ちは往おうらい来にあつまつて、れいの侍従長に、皇帝さまは、どんな
ごようだいでございますかと、たずねました。するとこのひとは、
いつものように「ペ」といって、あたまをふりました。

ひえこおつた青いかおをして、皇帝は、うつくしくかざりたて
た、大きなおねだいに、よこになっておいでになりました。宮中
の役人たちは、もう皇帝は、おなくなりになったと、おもつて、
われがちに、あたらしい皇帝のところへ、おいわいのことばを、

申しあげに出かけていきました。その下のめし使のおとこたちも、そここことかけまわって、そのことでしゃべりあいました。めし使の女たちもあつまって、さかなお茶の会をやっていました。広間にも、廊下にも、のこらず、ぬのがしかれているので、なんの足音もきこえず、御殿の中はまったく、しんかんとしていました。

けれども陛下は、まだおかくれになつたというわけではなく、やせほそり、色は青ざめながら、ながいびろうどのとばりをたれて、どつしりとおもい金のふさのさがった、きらびやかなしんだいの上にやすんでおいでになりました。高いところにあるまどが、あけてあって、そこからさしこむ月のひかりが、陛下とそのそば

におかれた、さいくものさよなきどりを、てらしていました。

おかわいそうに、皇帝は、まるでなにかが、むねの上ののつてもいるように、いきをすることもむずかしいようすでした。陛下が目をみひらいて、ごらんになると、おむねの上には、死神しにがみが、皇帝の金のかんむりをかぶり、片手には皇帝のけんを、片手に皇帝のうつくしいはたをもつて、すわっていました。そうして、りっぱなびろうどのとばりの、ひだのあいだには、ずらりと、みなれない、いくつものくびがならんで、のぞきこんでいました。ひどくみにくいおつきをしているものもありましたが、いたつておとなしやかなものも、ありました。これらのくびは、みんなこの皇帝のこれまでなさった、よいおこないや、わるいおこない



で、いま、死神がそのしんぞうの上になすわったというので、みんなきて、ながめているというわけでした。

「このことを、おぼえているか。」

「こんなことも、やったろう。」

と、かわるがわる、そのくびが、ささやきました。それから、つづいて、がやがやしやべりたてるので、皇帝のひたいからは、ひやあせが、ながれました。

「わたしは、そんなことは、しらないぞ。」と、皇帝は、おっしやいました。

「音楽をやってくれ、音楽を。たいこでも、がながんたたいて、あのこえの、きこえないようにしてくれ。」と、陛下はおさげび

になりました。けれども、くびはかまわず、なおもはなしつづけました。そうして死神は、くびのいったことには、どんなことでも、シナ人らしくうなずいてみせました。

「音楽をやってくれ、音楽を。小さいうつくしい金のことりよ。うたってくれ。まあうたってくれ。おまえには、こがねもやったほうせき宝ほうせき石もあたえた。わたしのうわぐつすら、くびのまわりに、かけてやったではないか。さあ、うたってくれ。うたってくれ。」と、陛下はおさげびになりました。

ところが、そのことりは、じつとしていました。あいにく、たれも、ねじをまいてやるものがなかったのです、このことりは、うたうことができなかったのでございます。

死神しにがみはなおも大きな、うつろな目で、皇帝をじろじろみつめていました。そしてあたりは、まったくおそろしいほど、しいんとしていました。

そのとき、きゆうにまどのとこから、この上もないかわいらしいうたが、きこえてきました。それは、まどのそのの枝にとまつた、あの小さな、ほんもののさよなきどりがうたつたものでした。さよなきどりは、皇帝がご病気だときいて、なぐさめてあげるために、げんきをつけてあげるために、歌をうたいに、やってきたのでした。さよなきどりが、うたうにつれて、あやしいまぼろしは、だんだん影がうすれて行きました。血は皇帝のおからだの中を、とつとつとまわりだしました。死神さえ、耳をとめて、その

うたをきいて、こういいました。

「もつとうたつてくれ、さよなきどりや。もつとうたつてくれ。」

「はい。そのかわり、あなたは、そのこがねづくりのけんをくれますか。そのりっぱなはたをくれますか。皇帝のかんむりをくださいいますか。」

そこで死神は、うたをひとつうたつてもらうたんびに、かわりに、三つのたからを、ひとつずつやりました。

さよなきどりは、ずんずんうたいつづけました。そして、まっしろなばらの花が咲いて、にわとこの花がにおい、青あおした草が、いきのこっている人たちのなみだでしめっているはかばのことをうたいました。きいているうち、死神はふと、じぶんの庭が

みたくなつたものですから、まどのところから、白いつめたい霧きりになつて、ふわりふわり出ていきました。

「ありがとうございます。」と、皇帝はおつしやいました。

「天国のことりよ、わたしはよくおまえをおぼえているぞ。わたしはおまえを、この国からおいだしてしまつたが、それでもおまえは、わたしのねどこから、いやなつみのまぼろしを、歌でけししてくれた。わたしのしんぞうに、とりついた死神を、おいはらつてくれた。そのほうびには、なにをあげたものであろうか。」

「そのごほうびなら、もういただいております。わたくしがはじめて、ごぜんでうたいましたとき、陛下には、なみだをおながしになりました。わたくしは、けつしてあれをわすれはいたしませ

ん。あのおなみだこそ、歌をうたうものの、こころをよろこばす、宝石でございます。なにはとにかく、おやすみあそばせ。そうして、またおげんきに、お丈夫じょうぶにおなりなさいまし。なにかひとつ、うたつてさしあげましょう。」

そこで、さよなきどりは、うたいだしました。——それをききながら、皇帝は、こころもちよく、ぐつすりと、おやすみになりました。まあ、どんなにそのねむりは、やすらかに、こころのやすまる力をもつものでしたろう。

皇帝はまた、げんきがでて、すっかりご丈夫になって、目をおさましになったとき、お日さまは、まどのところから、さしこんでいました。おそばづきの人たちは、陛下がおかくれになったこ

ととおもつて、ひとりもまだ、かえつてきていませんでした。ただ、さよなきどりだけは、やはりおそばにつきそつて、歌をうたつていました。

「おまえは、いつもわたしのそばにいてくれなければいけない。」と、皇帝はおつしやいました。「おまえのすきなときだけ、うたつてくれればいいぞ。こんなさいくどりなどは、こなごなに、たたきこわしてしまおう。」

「そんなことを、なすつてはいけません。」と、さよなきどりはいいました。「そのことりも、ずいぶんながらくおやくにたちました。いままでどおりに、おいておやりなさいまし。わたくしは、御殿の中に、巣をつくつて、すむわけには、まいりませんが、わ

たくしがきたいとおもうとき、いつでもこさせていただきましよ
う。そうしますと、わたくしは晩になりました、あのまどのわき
の枝に、とまります。そして、陛下のおところがたのしくもなり、
また、おこころぶかくなりますように、歌をうたつて、おきかせ
申しませう。そうです、わたくしは、幸福なひとたちのこと
も、くろうしている人たちのことを、うたいませう。あなた
のお身のまわりにかくれておりますわらいこと、よいこと、なに
くれとなくうたいませう。まずしい漁師のやどへも、お百ひやくし
姓よゆうのやねへも、陛下から、またこのお宮から、とおくはなれて
すまっておりますひとたちの所へも、この小さな歌うたいどりは、
とんで行くのでございます。わたくしは、陛下のおかんむりより

は、もつと陛下のお心がすきでございます。もつとも王冠は王冠で、またべつに、なにか神聖しんせいとでも申したいにおいが、いたさないでもございません。——ではまた、いずれまいって歌をうたってさしあげましょう。——ただここにひとつおやくそくしていただきたいことがございますが——。」

——「どんなことでも。」と、皇帝はおつしやりながら、たちあがって、ごじぶんで皇帝のお服をめして、金のかざりでおもくなっている劔けんを、むねにおつけになりました。

「それでは、このひとつのことを、おやくそく、くださいまし。それは、陛下が、なにごとでも、はばかりなくおはなし申しあげることをおもちになっていらっしやることを、だれにもおもら

しにならないということでございます。そういたしますと、なおさら、なにごとともつごうよくまいることでしょう。」

こういつて、さよなきどりは、とんでいきました。

おつきの人たちは、そのとき、おかくれになった陛下のおすがたを、おがむつもりで、はいってききましたが——おや、つと、そのまま棒^{ぼう}だちに立ちすくみました。そのとき皇帝はおつしやいました。

「みななもの、おはよう。」



青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集 第二巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月15日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本中、*で示された語句の訳註は、当該語句のあるページの下部に挿入されていますが、このファイルでは当該語句のある段落のあとに、5字下げで挿入しました。

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小夜啼鳥

NATTERGALEN

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>